

アメリカ生理学会主催「科学論文執筆 & 査読の合宿トレーニング」の参加報告

School of Applied Physiology, Georgia Institute of Technology 篠原 稔

アメリカ生理学会では、研究職キャリア支援として、学会発表の方法や就職面接の方法など、実践的なスキルトレーニングコースを提供している。そのうちの一つ、フロリダのディズニーリゾートで行われた3泊4日の合宿トレーニング Writing and Reviewing for Scientific Journalsに参加してきた。今回は、アメリカ生理学会のみならず、アメリカ遺伝学会とアメリカ解剖学会も協力し、講師陣は、それぞれの関連一流ジャーナルのアソシエイトエディター達というそうそうたる面々であった。このようなトレーニングは渡米したての頃にコロラド大学の授業で聴講したが [1]、それから10年以上経った今日、筆者自身も英文誌のアソシエイトエディターを務めていることもあり、一流エディター達の考え方を学ぶ好いチャンスであった。そして何より、大学でこの類の授業を始めようかと考えていたので、その準備として絶好のタイミングであった。

講師陣9名に対し、受講者は34名であった。参加条件は、トレーニング3週間前までにファーストオーサー論文草稿を提出できること。ワークショップでは自らの論文草稿に関して書き方の指導を具体的に受けるため、論文が無ければ始まらない。受講者のほとんどがアメリカの大学に通う院生であったが、ノルウェーからの参加者もいた。初めて論文を書こうという人、あるいはまだ数本目の人を主な対象にしていたのだが、運良く年長の筆者にも参加許可をいただいた。

受講生には、その他にも予習課題が課せられていた。受講者の専門分野にもとづき、予め3-5名からなるグループが作られ、担当エディター講師

が割り当てられていた。そしてトレーニング当日までに「論文の書き方・査読の仕方」に関するいくつかの課題資料を読んでオンライン試験を受け、また、グループ内メンバーのアブストラクトの問題点をリストアップする、という、それなりに労力のかかる予習課題であった。

トレーニング初日は夕方から始まり、趣旨説明と顔合わせの後、屋外デザートパーティと称して、スイーツを片手にディズニーの花火を見ながらの懇親会となった。筆者のグループのエディター講師は *Journal of Physiology* の Deputy Editor をも務める Barrett 女史が担当し、受講生は、筆者の他に4人の男子院生が顔を揃えた。なお、受講者同士のコミュニケーションが取りやすいように、ホテルは、受講者同士の相部屋となっていた。

トレーニング2-4日目は、各日とも、参加者全体でのレクチャー&質疑応答と、グループ別活動とが入れ子のようにスケジューリングされていた。

全体レクチャーは、論文を書く準備から査読の仕方まで、いくつかのテーマに分けられて体系的に進められた。総勢9名のエディター講師達は、それぞれが、レクチャーのいずれかのトピックの講師として担当した。多忙な研究者達に違いないのだが、驚いたことに、すべての講師陣が、自分の担当ではないレクチャーにも受講席で聴講していた。さらに、各レクチャー後の質疑応答の時間になると、数名の講師陣が聴講席から登壇し、質問に対して複数の視点から回答するように配慮されていた。このようにして講師陣すべてが受講者と同じ情報を共有することは、それに続くグルー

ブ活動での効率的なコミュニケーションにつながっていた。

グループ別活動では、直前にレクチャーで理解したばかりの基礎的な内容と予習課題で学習してきた内容を共通理解とした上で、エディター講師が中心になり、メンバーそれぞれの論文草稿の書き方の具体的な問題点と実際の改善法を、時間をかけ、一つ一つ丁寧に上げていった。少人数でお茶をすすりながら毎日毎日何度もテーブルを囲んでいると、仲間としての一体感がわいてきて、質問も気楽にしやすい雰囲気であった。このように、レクチャーで学んだ一般的な内容を、優秀なエディター講師によって、即座に自分達の論文草稿に具体的に当てはめられることを通じ、理論学習と実践学習が有機的に進んでいくことが実感できた。

受講生同士がお互いに学び合う、特に、お互いの論文草稿を気兼ねなく批判しあう、という自由な雰囲気を損ねないよう、受講生に対して自分の立場(アソシエイトプロフェッサー/アソシエイトエディター)を伏せておいた。このことは、思いもよらず自分自身の意識を変えることにもつながり、いつの間にか、自分も学生気分になっていた。久しぶりに言われたい放題批判されるのは、自虐的だが、能力開発的には楽しくて仕方がなかった。

全体レクチャーでも、グループ活動でも、日々、投稿論文のアクセプトやリジェクトに深く関わっている実体験に基づく生の情報や意見が右に左に飛び交い、アソシエイトエディター、査読者、そして論文執筆者としての自らにとって、「やはり」と確認したり、「そうだったのか」と目を見開いたり、向学心は増幅していくばかりだった。講師陣の専門分野は多岐に渡ったが、このように多くの優秀な人達が一堂に会した元で、最高質の教育を受ける機会に恵まれたことに興奮してばかりい

た。

合宿ワークショップとして、デイズニーリゾートの立派な朝食や昼食が専用ルームで提供され、そこでも著名な講師達と気楽にコミュニケーションできるようになっていた。そして、最終日前夜には、スポーツバーでアルコールを片手にした論文ディスカッションとなった。

この3泊4日の合宿トレーニング参加費は、宿泊・食事込みで\$800(約6万円)であった。これほど多くの一流研究者達と深くみっちり過ごせる機会は、海外留学でもありえない。アラフォー研究者の自己投資として、かなり実のある3泊4日の国内留学だった。そして、アソシエイトエディターに添削してもらった論文草稿という、最高の手土産さえも持ち帰ることができた。

講師陣が口を揃えて言っていた。「英語の文法があやふやな論文や、英語科学論文としての体裁が好ましくない論文に出くわした時には、研究者の知性が疑われる。これは、英語を第一言語とする国にも、そうでない国にも見受けられる」と。

英語圏でさえ、こうやって、英語で科学論文を書く教育を受けている。筆者も、今回の経験を参考にして、大学で同様の授業をする考えでいる。そして、いつか、このようなトレーニングの講師陣の一人として貢献できたら、と思っている。頭脳国際循環時代の現代 [2]、このような標準語での科学論文執筆に関する教育が日本でも広く行われることを願う。

文 献

1. 篠原 稔：体育教官のアメリカ標準研究者入門トレーニング。日本生理学雑誌 68：446-447, 2006
2. 篠原 稔：頭脳国際循環時代に若手研究者が育つための基本三要素：職務と時間と刺激。学術の動向 9月号：60-62, 2008